

特集

臨床現場での “触れる”の 今後を考える

「手当て」という言葉があるように、人は触れられることで癒されるのは、助産・看護を志した皆さんであればよく理解されていると思います。今、新型コロナウイルスの世界的な蔓延で、人との距離を取らざるを得ず、人に触れることにためらいが生じてしまうようになりました。心理的な壁にならないことを祈るばかりです。

このような事態を助産の現場ではどのように捉え、どのような代替策を講じているのか、さまざまな工夫と、妊産婦や家族に安心を届けている実際をご紹介します。気兼ねなく、妊婦のそばにいられるようになるまでの模索を、読者の皆さんと共有したいと思います。